令和２年度　　社会福祉法人・春生会　兒玉　邦彦

第１２代景行天皇実在論①
丑年に高屋村（都於郡）に出現した景行天皇と南九州最古の前方後円墳

〇日本書紀における景行天皇と日向国

景行１２年７月熊襲が背いて貢物を奉らなかった。１１月、後で名付けた日向国に着いて高屋宮を建てた。１２月熊襲平定の相談をし、その娘を味方につけて熊襲タケルを征伐した。１３年５月、襲の国全てを平定した。

高屋宮滞在６年、御刃媛を妃とし豊国別皇子をもうけた。日向国造の先祖である。１７年３月、子湯の縣の丹裳の小野にて日の出を見て“この国はまっすぐ日の出るほうに向いている”と言い、その地を日向と名付けた。この丹裳に関して二説ある。第一は西都の三宅神社の裏で、名前を記した柱が立っている。第二は郷土史家大町三男氏の説で、鹿野田神社南方の峯である。

両方行ってみたが、三宅の方は、真東はより標高の高い新田原基地で、海は見えない。第二の説は、都於郡側から行くと、あちこちに植林がなされ見通しできないが、さらに少し鹿野田神社側に進むと急に見晴らしが開け、真東の一ツ瀬川の河口越しに水平線が見通せる。先ほどの植林がなされていた平坦なところが、丹裳の小野かなと思った。三宅の方は 5～6キロで尚且つ渡河しなければならず、鹿野田の方は１キロ程度。高屋宮跡と言われている黒貫寺からの距離である。早朝、日の出を見に行く距離を考えても、鹿野田神社の南方の峯が丹裳と確信した。

〇年代推定

実在が不確かながら、４世紀初期の天皇と言われている。この時代の天皇の年代は、干支で表現され古事記と日本書記でも食い違い、尚且つ百歳以上の長寿が続いているので信頼できない。景行・成務・仲哀はすべて親・子・孫で各世代を２５年とすると７５年となる。仲哀天皇は早死にしたが神功皇后を一体と考えることにする。神功皇后が七支刀を百済から贈られたのが AD３７２年と推定されているため、仲哀・神功の皇位期間を案分すると 19 年となり、遡ると景行天皇が皇位に就いたのは、はなはだ乱暴だが３０３年となる。北海道教育大の栗原薫教授が干支をもとに倍年法（古代は１年を２年とカウントしていた説）等で推定した景行天皇の時代は、３０６年からである。栗原説を採用し、案分によって景行１２年を西暦年数に置き換えると 310 年となる。仮定の数値を操作しているため、AD３１０年前後に父親垂仁天皇の陵墓築造の目途をつけ、景行天皇は高屋村（都於郡）に出現したと考えるべきであろう。

〇南九州最古の前方後円墳はどこか

日本で最古の前方後円墳といわれているのが、奈良の纒向の箸墓古墳である。その形状によく似た古墳が、西都原の８１号古墳と檍１号古墳と志布志の先の肝属の塚崎１１号古墳である。発掘調査によって西都原と肝属の古墳からは布留１式という土器が検出され、西暦２９０年から３５０年の間に築造されたことが分かった。檍に関しては布留２式が検出されそれ以降に築造されたことが分かった。資料によっては多少混乱しているのだが。この三基の古墳に共通するのは、近くに高屋神社あり景行天皇の伝承があるということだ。一ツ瀬川水系には西都原８１号古墳と都於郡に高屋神社がある。肝属川水系には塚崎１１号古墳があり、一山越した内之浦にやはり高屋神社がある。景行天皇は当初肝属の豪族との交渉を目的としたが、豪族の抵抗か河口の足元の悪さかで、もう一つ先の内之浦を目指したのだろう。伝承

でも船で来たとある。陸上軍ではこんな方針転換はできない。新別府川水系にも村角に高屋神社があり、その南端に檍１号古墳がある。この古墳は少し遅れての築造となっているが、標高が低く新別府川や大淀川の堆積が進んで氾濫の可能性が少なくなってからの築造かもしれない。檍１号古墳の少し北側から標高は高くなり住宅地として開発が進んでいる。そこには、取り壊されたより古い前方後円墳があったかもしれない。これらの古墳は、いずれも水田を見下ろす眺望の開けた先端部にあり、いかにも優先的に築造されたように思われる。布留１式土器は、中央値としては３２０年である。西都原８１号墳と塚崎１１号墳は、AD３２０年前後に築造されたものと考えられる。伝承を踏まえると、景行天皇が都於郡に登場して、今で言うなら農業指導・納税指導・安全保障の話し合いをしたものと思う。当時としては、近代的な多くの鉄器で武装した軍隊を背景に行っていったものと考えている。漢の冊封体制を参考にして、間接的支配でヤマト王権を全国に拡大（ヤマト化）していったものだろう。南九州の前方後円墳からより古い布留０式土器が出てこない以上、景行天皇によるヤマト化が行われてから、南九州の前方後円墳は築造されたと考えるべきではないだろうか。前方後円墳の築造は、その地域の豪族が、ヤマト王権のネットワークに入ったことを物語っている。高屋神社の存在や前方後円墳が次々に築造されたとすれば、その地はヤマト化の中で、安定的に発展していったものと思われる。
注）景行元年が未年のため、倍年法で計算すると高屋村に出現したのは丑年となる。

第１２代景行天皇実在論②
古代豪族平群（へぐり）氏と国偲び歌
〇ヤマトの古代豪族平群（郡）氏について
　奈良盆地には、中部西側に平群という町がある。古代豪族平群氏の発祥の地である。軍事豪族として有名であり、ヤマト王権を支えていた。現在は平郡さんと字を変えて名乗っておられる。兵庫県に６００名ほど次は宮崎県に１５０名ほど大阪・広島が続くが、あとは少数の人数がならぶ。宮崎の１５０名は、ほとんどが都於郡周辺の岩爪から荒武である。AD９３０年代に成立した和名抄に兒湯郡に平群郷ありと、姓氏家系大辞典にある。当時は平群と書いていたが、いつのまにか全国的に平郡と書くようになったようだ。ちなみに古事記では幣具理、日本書紀では幣遇利となっており、字そのものに拘りなく音さえ一致すれば良かったようである。
　都於郡周辺の平郡さんに、ルーツを聞いてもはっきりしない。相当な年数が経っており、いつしか忘れられたのだろう。最も考えやすいのは、景行天皇が人事配置していったのではないだろうか。九州東南部の熊襲族の住む未開の地を、新たに日向国としその中心を高屋村（都於郡）においた。その後中心は妻の方に移るのだが。新たに置いた日向国は、将来稲作可能地になるであろう、広大な氾濫原を有していた。その地を安定的に発展させるため豊国別皇子をもうけ、彼を支えるために景行軍に従軍していた平群の兵士を一部置いて行ったものと考える。当時、平群の人々はまだ豪族化していなかったようで、人事異動しやすかったのかもしれない。次の項をよく読んでいただきたい。
〇国偲び歌
・ヤマトハ、クニノマホラバ、タタナヅク、アヲガキヤマ、コモレル、ヤマトシ、ウルハシ。
・イノチノ、マソケム（マタケム）ヒトハ、タタミコモ、ヘグリノヤマノ、シラガシガエ（ハ）ヲ、ウズニサセ、コノコ（ソノコ）。
　この二首が古事記では景行天皇の皇子の日本武尊の歌となっており、日本書紀では父親の

景行天皇の歌となっている。下の歌のかっこ書きは、古事記のもので日本武尊の歌とするために原本を微修正したものと思われる。マソケムの方がより古代の言葉とのことで、成立は古事記の方が少し古いけれど、日本書紀の方が原本に忠実と思われる。時代別国語辞典上代編によれば、マソケム（摩會祁務：日本書紀）は健やかに命永らえているとあり、マタケム（麻多祁牟：古事記）は安全で無事であるとある。日本武尊は能褒野で病死するのだけど、その時の辞世の歌とされている。「命が安全で無事な人（病気でない人）は、平群の山の生気溢れる樫の葉を髷に挿しなさい。ヤマトの人たちよ。」となり、一般的に古代史上の人気者日本武尊の歌とされている。日本書記の訳文も、原文に拘わらずマタケムとされていることが多い。

景行天皇が丹裳の小野で詠んだ歌とすれば、近いうちに別れ別れになる平群の兵士たちに、「命永らえたら平群に帰ってきて、生気溢れる樫の枝を髷に挿しなさい、ここにいる諸君よ。」となり惜別の歌である。この歌の描く背景の解像度が一挙に上がるのを感じていただけるだろうか。

景行天皇は、実在が疑われている天皇でもある。正確な年齢・年代の決め手がない。日本書紀に目を通しながら考えていると、景行天皇が日向に来て南九州をヤマト化してから、前方後円墳が築造されていることが不確かながらわかってきた。そして天皇家を支えていた古代豪族の平群氏を名乗る方々が、都於郡に多数いらっしゃることも分かってきた。日本書紀の平群の兵士との惜別の歌を理解したら、迷うことなく景行天皇実在論者になっていただけるだろう。平群氏は、景行天皇以降五代にわたる忠臣の武内宿禰の子孫とされているが、中央有力豪族はすべてそうなっている。記紀編纂の時、有力豪族が自らの出自を武内宿禰にしたといわれているが、図らずもそれを証明したことになる。景行天皇以前から、在地兵士や豪族が、天皇家を支えていたものと考えている。筆者の職場に旧姓平郡さんがいる。名前ゆえに、小学校でいじめられることが多く良いことはなかったそうだが、あなた方こそ、ヒムカ国のエスタブリッシュメントなのだ。しかも、１７００年間その名前を保持し名乗り続けたことは、ため息すら出そうです。

第１２代景行天皇実在論③

景行天皇にまつわる他の伝承

〇生目神社の伝承（宮崎市）

景行天皇は、熊襲征伐の途中父垂仁天皇（いくめいりひこいさちのみこと）の命日にこの地で御霊祭りを行った。それがもとで生目神社と名乗るようになったとある。ここで、併せて戦勝祈願をして戦いに向かったのだろうか。

〇日吉神社の神職宮永家の古文書（国富町）

犬熊村（日吉神社のあるところ）に年老いた熊がいて、時々出てきて人を食らっていた。住民が恐れていた時、景行天皇が巡幸され、それを聞いて熊に向かって矢を射かけられた。突然弓が三つに折れてしまった。そのすきに熊が狂ったように飛び掛かろうとした時、一頭の白犬が出てきて老熊をかみ殺して天皇を助けた。白犬は神としてあがめられた。

この神話的古文書を、どう理解すべきだろうか。

〇綾南川の伝承（綾町）

綾町には景行天皇と熊襲との戦いの伝承がある。熊襲というと鹿児島のイメージが強いが、この時期ヤマト王権に従わない南九州の種族はすべて熊襲だから、古代宮崎人が熊襲であっても何ら不思議ではない。曽於や都城は、内陸部で川も急流であり朝貢させるのが困難であ

る。当時は牛馬がいなく（魏志倭人伝による）、重いものの運搬はもっぱら船に頼っていたようである。そのため、景行天皇は肝属周辺以外の鹿児島には行っておらずヤマト化もしていないように考えている。そこには、前方後円墳も築造されていない（古墳時代の後期に都城盆地の北部に少し築造されているが）。肝属をヤマト化した後、来た時と同じように船に乗って４日程かけて一ツ瀬川を遡って、都於郡の高屋宮に帰ったものと考えている。ということは、景行天皇の熊襲征伐は、高屋神社のない大淀川水系・小丸川水系等の話になるのではないだろうか。

綾町には錦原・五ヶ所・十ヶ所の戦いの伝承があり、景行天皇軍と熊襲軍が綾南川をはさんで戦い、景行天皇が熊襲を浦之名に追い払ったとある。二反野から山道を抜けて浦之名へ、後に延喜式で官道とされたルートだろうと考える。ラ・ルナルーチェというレストランの横を通り、かっての高原フェニックスゴルフ場の取り付け道路を下り浦之名に降りる。最も合理的なルートだと予想している。

これらの伝承で、日吉神社の古文書が意味不可解である。AD３１０年ごろの話で、その後数百年は文字化されることはなかっただろう。文字化する時、勝手な空想で書き残したのだろうか。こんな見方はできないだろうか。景行天皇の話で老熊といえば熊襲のイメージが付き纏う。熊襲と景行天皇の争いとすれば、景行天皇を味方したものがいたことになる。その仮定を展開すると、景行天皇のヤマト化に対して守旧派の熊襲とヤマト化派の熊襲（白犬）がいることになる。守旧派の熊襲に対して景行天皇軍とヤマト化派の熊襲連合軍の戦いがあったのではないかと考える。ヤマト化派が勝利し権力をつかむことになっているのだが、貢物（多分米だと考えている）をするには当然労働力が必要である。守旧派を根絶やしにしなかったとすれば、追い払われた守旧派は、浦之名から高岡を回りなに食わぬ顔で国富・綾に戻り生活をしたのではなかろうか。ヤマト化派にとっても、戦った守旧派とはいえど、以前は一緒に仲良く田植えをした間柄である。豪族たちの社会の一体化を取り戻すために、事件のほとぼりが冷めたころから、具体的名称を避け熊や犬に置き換えられたストーリーになり、ことの顛末の核の部分のみを後世に語り伝えてきたのではないだろうか。そしていつの時代か、こんな形で文字記録されたのではなかと考えることができる。トランプだバイデンだと言っている間は、アメリカの一体化は実現できないのである。日吉神社は、生目神社と綾南川を結ぶ山裾の道にある。

かなり飛躍した空想のそしりは免れないけれど、こう考えると三つの伝承を何とか繋げることができる。日本書記における景行天皇の熊襲征伐の話は、熊襲の内部協力者を得て総力戦ではない斬首作戦を行っている。生目古墳群や本庄古墳群の築造年代の解明が、これらの伝承と日本書記の話に、根拠を与えることになるかも知れない。

都於郡の山頂より真東に太平洋の水平線が見え、真っすぐ朝日がさすことがわかる。ここが宮崎・鹿児島を日向と名付けた丹裳である。

都於郡の黒貫寺　景行天皇の高屋宮の跡と言われている。

このあたりに平郡さんが住んでいる。
景行天皇軍の駐留したところか。

都於郡の高屋神社。かって高屋村と言っていたという。

宮崎・村角の高屋神社。
景行天皇軍の駐屯地跡か。

大隅・内之浦の高屋神社。
国見山を越えた麓が塚崎古墳群。
景行天皇軍の駐屯地跡か。

古墳群
西都原８１号古墳
新田原古墳群
新富町
西都ＩＣ
日向新富
東諸県郡
国富町
丹裳
高屋宮（聖眞寺）
高屋神社
九州自動車道
宮崎平野
宮崎市
日豊本線
佐土原駅
石崎川
綾町
東諸県郡
国富町
本庄川
錦原・五ヵ所・千ヵ所の戦い
日吉神社
国富ＳＩＣ
日向住吉駅
住吉ＩＣ
蓮ヶ池駅
村角
高屋神宮
シーガイアＩＣ
日向灘
大淀川
宮崎西ＩＣ
宮崎神宮駅
根１号古墳
宮崎港
宮崎駅
生目神社
東九州自動車道
宮崎平野
南宮崎駅
地理院地図

生目神社
宮崎
大淀川
日豊本線
青島
戸崎鼻
三股
都城
曽於
日南
広渡川
大島
日南線
志布志
串間
菱田川
志布志湾
都井岬
大崎
東串良
肝属川
塚崎１１号古墳
内之浦
高屋神宮
火崎
地理院地図